若手人材にとって学術大会をより魅力ある形にするために何ができるか？

○吉武 良治、赤松 幹之、石橋 基範、笠松 慶子、下村 義弘、村木 里志
山田クリス 孝介、横井 元治、榎原 毅（JES学会改革・戦略委員会）

What can we do to make the academic conference more attractive as a brilliant stage for young academics and practitioners?

Ryoji YOSHITAKE, Motoyuki AKAMATSU, Motonori ISHIBASHI, Keiko KASAMATSU, Yoshihiro SHIMOMURA, Satoshi MURAKI, Kosuke C YAMADA, Motoharu Yokoi and Takeshi EBARA
(The JES Strategy and Innovation Committee)

1. はじめに

年1回開催される全国大会や各支部大会などの学術集会は、(一社) 日本人間工学会(JES)の主要事業のひとつである。研究者の研究成果を公開・発表し、科学的妥当性についてオープンな議論を行う場として、学術の発展のために重要な位置づけを持つ。また、研究者間の学術サロンとして参加者間の交流を深め、人的ネットワークの形成促進の場としても重要な役割を担っている。そして、若手人材にとっては、先輩諸氏や専門家から助言や有益な視点を教授してもらい、研鑽を積む機会となり、学術コミュニティによる次世代人材育成の場としても学術集会は重要な機能を有している。一方で、近年では発表演題数や学術集会への参加者数が全国大会・支部大会を問わず減少傾向にある。母集団である学会の会員数自体が15年前に比べ約3割減少（2002年：2,116人→2017年4月時点：1,447人）していることも大きな要因と考えられるが、研究者を取り巻く環境の変化や今日の研究者ニーズへの要請に対応しきれていない面も否めない。更に、学会員に対し2016年11-12月に実施したweb調査では、全国大会・支部大会へ毎年参加していると回答した人は52%を占める一方、ほとんど・全く参加していないと回答した人が2割程度いることから、大会参加者が固定化している可能性も考えられる。学術集会のあり方について本質的な議論が必要であろう。

そこで学会改革・戦略委員会では、これまで2回の全体会合を開催し、多様化する社会ニーズと学術ニーズへ即応する学会基盤を整備し、学会活動の活性化をはかる方策について議論を重ねてきた。以下では、学術集会のあり方についての委員会内議論を紹介する。いずれもアイディア段階のものであり、学会の運営制度への実装が決定して

いるものではない。学会員諸氏と共に若手人材にとって学術大会をより魅力ある形にするための方策についてシンポジウムでは議論を行いたい。

2. 学術集会を魅力的にするためのアイディア（委員会内での議論内容）

1) 学会発表を学会がプロデュースする

学会発表形式は、各座長に運営が一任されており、また発表自体も発表者個人の範囲で行われている。大会運営も各大会に一任しており、実質的に学会本部が運営に関与する面は少ない。そこで、例えば、「あの研究者みたいになりたい」「自分もあの場で発表したい」という求心力のある、魅力度の高い発表機会を学会本部が支援するのはどうか。若手人材にとって「学会発表＝ドリームヒーローになれる」というワクワク感を学会が演出するために、事前にエントリーされたモノは一定の審査の下、学会がプレスリリースを行うか、または学会HPで研究内容の取材記事を取り上げる。「ヒーローになれる感」を学会本部が毎年の大会で継続的にプロデュースすることで学会発表自体のプレゼンスの向上をはかる。

2) 若手が参加しやすい・参加したい場を作る

人間工学を学ぶ学生・初学者が中心となった若手が集う交流会（若手の会）を組織する。学術集会は研究者間で交流をはかる社交場であるが、若手人材によっては「敷居」が高く感じられる。会員数が増加している他学会では若手の会を全国大会の前日に開催するなど、一定の成果をあげているように思える（日本疫学会など）。若手人材が自律的に組織した若手の会の活動を学会が支援することで学会活動を担う次世代人材の参画を促す。

3) 学会発表・質疑を活性化させる

JES全国大会では発表時間12分＋質疑3分で運営されることが慣例である。3分間の質疑時間では十分な議論が行えないので、ひとつの演題に対し、じっくり議論を重ねることができるような機会を作る（例えば、発表15分＋質疑10分など十分な討論時間を確保）。JESでは学会発表後に学会誌へ論文投稿を行う際に迅速な査読を行うクイックレビュー制度を運用しているが、例えばそのような事前申請演題については独立したセッションを用意し、指定討論形式で充実した質疑を行えるような場を作ること、先輩諸氏や専門家から助言や有益な視点を教授してもらえる機会を提供する。

4) 学際的な大会運営組織のルールを作る

人間工学のキー要素は「学際性」である。多様な専門領域の横断的な連携により社会の課題解決に資する実践科学として、大会運営のあり方についてもその思想を実践し、大会運営のグッドプラクティスを提示することが重要である。例えば、クォータ制（Quota system）を導入した大会運営の規程を整備する。クォータ制とは、もともと政治における男女間格差を是正するための暫定的な方策で、議員・閣僚などの一定枠を男女に割り当てる制度である¹⁾。大会実行委員会を組織する際には、産業界・大学・研究所などのセクター別の割り当て、実行委員数（できるだけ多くの人に大会運営に参画してもらうための最低基準数または割合）などの枠組みを定めることで、多様性・学際性のある大会運営組織を形成することで特色ある大会運営を促すことに資する。

5) 学術集会の集約化を図る

近年では大学教員の研究・教育以外の業務が増え、また、講義は規定回数実施の厳格化が進む中で平日開催の学術集会への参加が困難になりつつある現状がある。また、類似学会・関連学会が増加し、大会の開催時期が重なっていることもあって、演題数の減少や参加者数減少に拍車をかけている可能性がある。研究者リソースが限られている中で、学術集会の活性化は単一の大会で対処する事案ではなく、他学会・他支部の学術集会との協力を積極的に推進し、人間工学コミュニティの集約・連携を図る必要があるのではないかと

（例えば、支部大会の集約化や他学会との共催をはじめ、大会間でweb会議システムを使いオンラインで繋いだ合同セッションを設けるなど）。複数の類似学会に所属する研究者にとって、分散化されてしまっている学会発表を集約化することは参加日数・参加費の面でもメリットが生まれる。

6) 学会刊行物の社会発信力を高める

JES全国大会の講演集は学会誌のsupplementとして国際標準逐次刊行物番号（ISSN）が付与され、また、オンラインジャーナルとしてもJ-stageのサイトで公開されているが、支部大会や部会による研究会の研究成果発表はそのような社会発信がなされていない。貴重な研究発表も、オンラインジャーナルで提供されない知見は学術コミュニティでは埋没してしまい、更に近年ではオンラインで適切なプラットフォームに公開されていない研究は研究業績にカウントされない場合が多いため、学会発表の場として選択されない状況がある。各支部・部会が独自に講演集を発行するのではなく、学会本部が支部講演集や部会発表会についても学術刊行物として一元的に管理し、演題登録、講演集発行、J-stage掲載・DOI付与までの一連の業務を一元化し、各大会で共通して使ってもらえるシステム基盤を学会本部が整備・提供することが必要である。

3. おわりに

以上、委員会内で議論のあった大会活性化策について概説した。比較的中長期的な戦略の下で進める必要があるものもあれば、すぐに着手できる対策もある。シンポジウムではこれらをたたき台に会員諸氏との意見交流を深め、魅力的な学術大会を開催するために有効なアイデアを議論するきっかけとしたい。

参考文献

- 1) UNITED NATIONS DEVELOPMENT PROGRAMME, Human Development Reports: Securing equality through quota systems and equal opportunity legislation, accessed on 2017/4/28, available from <http://hdr.undp.org/en/content/securing-equality-through-quota-systems-and-equal-opportunity-legislation>